

「特養慰問が転機」お年寄り手助けしたい

東海大医学部5年生の銘美世さんは今年、31歳になる。現役合格した同年生の仲間より7つ年上だ。

付属病院の中を白衣姿で駆け回り、実習に励む彼女が、「芽衣かれん」の名で宝塚歌劇団の舞台上に立っていたことを知る人は、病院関係者の中にも少ない。「タカラヅカは私にとって、夢の舞台でした」

だが、医者になるという新しい夢が芽生えたため、スポーツライトと拍手の世界から飛び出した。

初めて宝塚歌劇に触れたのは、中学2年の秋。東京・日比谷の劇場で、「ペルサイユのばら」を観た。

おもちゃ箱のようにキラキラした世界で、笑顔を振りまくタカラジェンヌたち。観ているだけで、幸せな気持ちがあふいて広がった。

「私もあの舞台上立って、人に喜んでもらいたい」

早速、宝塚音楽学校の受験準備を始め、中3の終わりにまず挑戦した。1回目は失敗したが、

タカラジェンヌの選択

夢の続き 医の道

翌春の再挑戦で合格した。

レッスン漬けの2年間を経て、娘役として歌劇団に入団。新人公演で演じたのは、天才外科医「ブラック・ジャック」の

助手の「ピノコ」役だった。「トッパになれなくても、印象に残る役者になれれば」。必死に自分を磨く毎日充実していた。

舞台から降りることは、考えられなかった。

入団2年目の秋。特別看護老人ホームで歌を披露し、入所者と合唱した。

特養の職員が提案したのは、「アンパンマン」の主題歌。職員は、幼児をあやすようにお年寄りに語りかけ、手拍子をとるよう呼びかけた。歌いながら、違和感がこみ上げてきた。

「お年寄りは敬うべき存在なのに、『何でアンパンマンなの』って考えたら、たまたまなくなっただけです」

東京の実家では、初めに訪れた特養での体験は、心に重しいこりを残した。なぜ特養のお年寄りは家族と暮らせないんだろう、どうして人はほめてしまわんのかな……。

様々な疑問がわき起り、医療や福祉の本を、あさるようになって読むようになった。

特養に医者の姿がなかったことも、引かかった。

お年寄りの身近に医者がいれば、医学の力で、認知症の進行や足腰の衰えを防ぐことができ

るのでは……。中2で宝塚を夢見た時と同じように、医者という仕事に急に気になり始めた。

だが、高校を1年で中退して音楽学校に入ったため、大学受験に必要な勉強はほとんどしていなかった。思いを即座に行動に移す勇気が出なかった

点は、少女のころとは違っていた。



愛と子どもが多かった美世さん。宝塚時代の風情も (1995年ごろ)

宅医療のニーズは大きくなるのに、受け皿がない。頑張るって、やる気がわいてくるんです」

背中を押したのは、それまでも、黙って好きなことをやらせてくれた母の一言だった。「やりたいことをやりなさい」

舞台の合間に、受験参考書を

開く生活が始まった。

音楽学校を含めて5年余りを過ごした宝塚を去ったのは、22歳の時。同期39人で、最も早い退団だった。

大検は退団1年目に1回でパス。医学部受験は3回目で成功した。

医学生になってすぐにヘルパーの資格を取り、退職した看護師らとともに、お年寄りの在宅介護を支えるサークルを発足させた。

通院の手助けや食事の世話が主な活動だが、「家で診てくれるお医者さんを紹介してほしい」との相談を受けることも度々だ。しかし、在宅医療を行う医者はまだ少なく、切実な訴えに答えられない場合が多い。

その度に、自分の選択は間違っていないか、自分の実感する。「お年寄りは増え続け、在宅医療のニーズは大きくなるのに、受け皿がない。頑張るって、やる気がわいてくるんです」

ともあるが、自分でそう思ったことはない。「タカラヅカに入らなかったら、特養で歌うことはなく、医学部をめざすことにはならなかったわけですから」

医師国家試験は来年2月。合格したら、まずはお年寄りのハビリを手がける病院で経験を積もうと、今から決めている。(木下敦子)



医学生仲間と語り合う美世さん。「タカラヅカと同じように、病院でも人とのつながりを大切にして生きていきたい」(神奈川県伊勢原市の東海大病院で)